

# 境谷遺跡 第2次発掘調査 概要報告

—三重県鈴鹿市国分町字境谷 所在—

2008年 3月

鈴鹿市考古博物館

# 例 言

- 1 本書は、三重県鈴鹿市国分町字境谷に所在する境谷（さかいだに）遺跡第2次発掘調査の概要報告書である。
- 2 発掘調査は、鈴鹿市リサイクルセンター2期事業建設に伴う事前調査として鈴鹿市文化振興部考古博物館が実施した。
- 3 発掘調査は、以下の体制で行った。  
調査主体 鈴鹿市  
調査担当 鈴鹿市 文化振興部 考古博物館  
(組織及び構成)  
鈴鹿市考古博物館館長 中森成行  
埋蔵文化財グループリーダー兼主幹 藤原秀樹  
埋蔵文化財グループ 副主幹 新田 剛  
副主幹 浅野隆司  
主査 田中忠明  
事務職員 吉田隆史 田部剛士  
嘱託職員 下津菜な子 業天唯正 伊藤 洋  
臨時職員 杉本恭子 永戸久美子 別府智子  
加藤利恵 横内江里
- 4 調査は、上記係員のうち、浅野・下津・業天が担当し、新田・田部の協力を得た。
- 5 現地での調査期間は、平成19年5月23日から平成19年11月30日である。
- 6 土工部門と図面作成は株式会社イビソクに委託した。景観撮影は株式会社アイシーに委託した。
- 7 本書は業天が執筆し、浅野・下津・業天が編集した。
- 8 座標は、世界測地系を用いている。
- 9 本書における遺構の性格は、下記の略記号を用いて表した。  
SH：竪穴住居 SB：掘立柱建物 SD：溝 SK：土坑 SX：土壇墓
- 10 本調査にかかる遺物・図面・写真はすべて鈴鹿市考古博物館が保管している。

## 本文目次

I	はじめに	1
II	位置と環境	1
III	遺構と層位	7
IV	まとめ	12

## 挿図目次

第1図	境谷遺跡位置図	2
第2図	境谷遺跡第2次発掘調査区位置図	3
第3図	境谷遺跡第2次発掘調査遺構配置図	5・6

## 写真図版目次

P L 1	調査区周辺地形/調査区全景	14
P L 2	調査区西半全景/SH25 完掘/SH29 遺物出土状況/SH49 完掘/SH90 完掘	15
P L 3	SK403 完掘/SK351 完掘/SH14 完掘/SH24・SH67 完掘/SH24・SH67 遺物出土状況/ SK302 完掘/SH15 完掘/SH15 カマド遺物出土状況	16
P L 4	SH97・SH98・SH502 完掘/SB116 完掘/SB107 完掘/SB106 完掘/SK419 完掘/ SK474 遺物出土状況/SX394 遺物出土状況	17

# I はじめに

境谷遺跡は三重県鈴鹿市国分町字境谷に所在し、弥生時代から平安時代にかけての包蔵地として周知されている遺跡である。鈴鹿市リサイクルセンター2期事業建設にともなう埋蔵文化財の記録保存として、平成17年度に試掘調査、平成18年度には約8,000㎡を対象にして第1次調査が行われた。その結果、境谷遺跡は弥生時代から奈良時代にわたる複合集落遺跡であることが判明した。

平成19年度は、第1次調査区の北側に隣接する約7,600㎡を対象に5月23日から11月30日まで第2次発掘調査を実施した。竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝などの遺構のほか、旧石器時代から中世にかけての遺物を確認した。また、12月16日には現地説明会を開催し、76名の参加を得た。

# II 位置と環境

鈴鹿市は伊勢平野の北部にあり、西に鈴鹿山脈がそびえ、東には鈴鹿川、金沢川、中ノ川によって形成された沖積平野が広がる。境谷遺跡(1)<sup>1)</sup>は鈴鹿川の下流左岸、内部川開析扇状地の南端にあたる標高43~44mの高位段丘上に位置する。また、周辺の段丘では開析谷によって区切られた支丘群が形成され、約30mの比高差を持って鈴鹿川低地と接している。

鈴鹿川下流域の段丘上は後期旧石器時代の遺跡が密集する地域であり、20点のナイフ形石器が採集された西ノ岡遺跡(2)をはじめ、境谷遺跡や寺山遺跡(3)でもナイフ形石器が採集されている<sup>2)</sup>。

縄文時代は木田坂上遺跡(4)<sup>3)</sup>で縄文時代晩期の土器棺墓がみられるほかは目立った活動の痕跡は見られないが、平野部では上箕田遺跡(5)<sup>4)</sup>において晩期にまで遡る遺物が確認されており、上箕田遺跡の開始が晩期まで遡ることを示唆するものとして注目される。

弥生時代中期になるとにわか遺跡が急増し、境谷遺跡の近隣では中尾山遺跡(6)<sup>5)</sup>で集落・墳墓が、沖ノ坂遺跡(7)<sup>6)</sup>でも集落が営まれる。扇広遺跡(8)<sup>7)</sup>では環濠を備えた集落が出現する。さらに西に目を向けると前期に始まる一反通遺跡(9)<sup>8)</sup>では、銅鐸片や銅鐸形土製品のほか中期から後期の環濠が発見されている。また、玉造り遺跡として磐城山遺跡(10)<sup>9)</sup>が知られている。前期まで遡る遺跡は主に沖積地に認められ、環濠を備えた上箕田遺跡、須賀遺跡(11)<sup>10)</sup>をはじめ、後期には神戸中学校遺跡(12)が集落として機能し始める。このように段丘側と低地側とでは遺跡の機能またその

消長に多様性がみられる。

古墳時代に入ると全長85mの寺田山1号墳(13)<sup>11)</sup>や、富士山1号墳(14)・10号墳(15)<sup>12)</sup>といった前方後円墳が造営されるほか、円墳や方墳が多数築かれる。前期から中期にかけて鈴鹿川左岸は主に墓域として機能していたようであり、集落跡として知られる遺跡に乏しい。一方、低地部に目を移すと神戸中学校遺跡、宮ノ前遺跡(16)、八重垣神社遺跡(17)<sup>13)</sup>において古墳時代前期の大規模な集落の存在が想定されている。

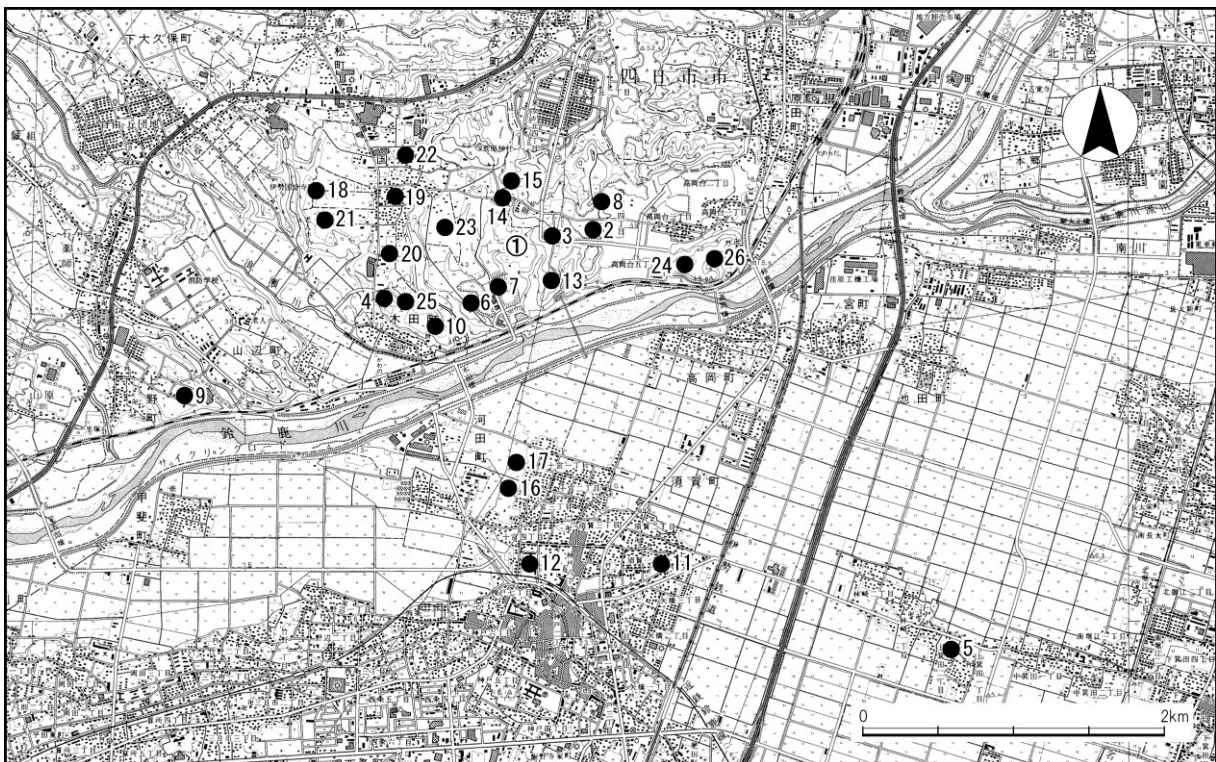
古墳時代後期以降は引き続き古墳が多数築かれるとともに、境谷遺跡や寺山遺跡などで再び集落が営まれるようになり、段丘上で人々の活動が顕著になっていく。その流れは古代になると本格化し、伊勢国分寺跡(18)、国分遺跡(伊勢国分尼寺跡推定地)(19)、南浦遺跡(大鹿廃寺)(20)や狐塚遺跡(河曲郡衙正倉)(21)<sup>14)</sup>、豪族の居宅跡と考えられている木田坂上遺跡が狭小な範囲に分布する。

平安時代にかけては、国分北遺跡(22)<sup>15)</sup>で上述の3寺院と河曲郡衙に軸を同じくした集落が存続するほか、国分東遺跡(23)<sup>16)</sup>においても同様の計画的な集落の存在が想定されている。

中世には高岡城跡(24)や木田城跡(25)、また高岡山中世墓(26)などが周知されているものの、詳しいことは判明していない。国分東遺跡では、平安時代よりさらに大規模になった集落が検出されている。境谷遺跡の所在する現在の国分集落のまともはのころまで遡るものとみられる。

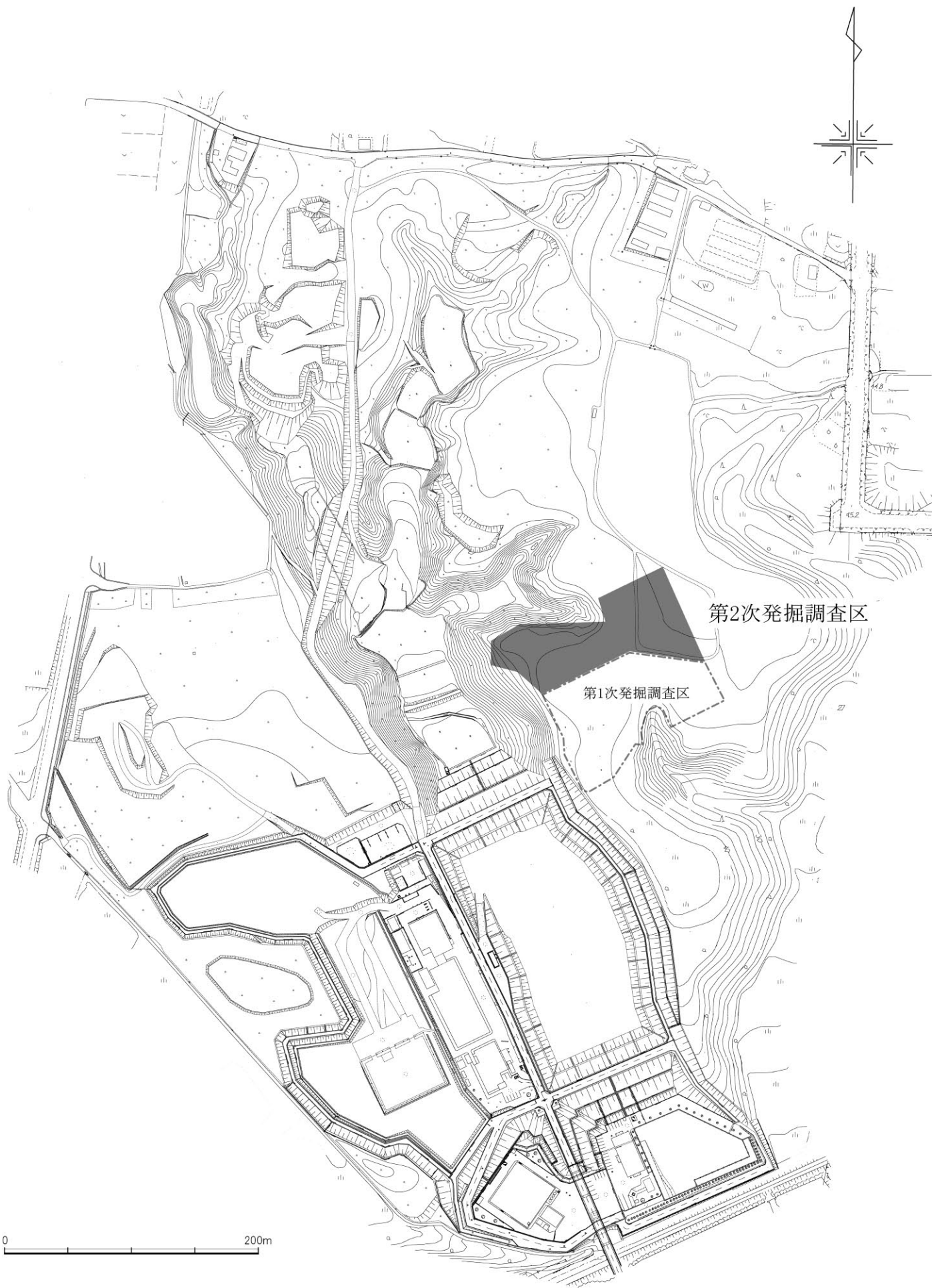
註

- 1) 浅野隆司ほか『境谷遺跡 第1次発掘調査 概要報告』鈴鹿市考古博物館, 2007
- 2) 岡田 登「北勢地方の旧石器時代遺跡—四日市市内の遺跡に関連して」『四日市市研究』第4号, 1990
- 3) 藤原秀樹「Ⅲ.1 木田坂上遺跡(第2次)発掘調査報告」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』鈴鹿市教育委員会, 1996
- 4) 新田 剛『上箕田遺跡』鈴鹿市教育委員会, 1993  
真田幸成『上箕田』鈴鹿市教育委員会, 1970
- 5) 新田 剛「第3章 弥生時代 11 中尾山遺跡」『三重県史 資料編 考古1』三重県, 2005
- 6) 藤原秀樹「沖ノ坂遺跡」『発掘された鈴鹿1991 発掘調査概報・概要集』鈴鹿市考古博物館, 2003
- 7) 新田 剛「第3章 弥生時代 12 扇広遺跡」『三重県史 資料編 考古1』三重県, 2005
- 8) 新田 剛「9. 一反通遺跡発掘調査報告」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』鈴鹿市教育委員会, 1997
- 9) 森川常厚『磐城山遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター, 1994  
杉立正徳「6. 磐城山遺跡発掘調査概要」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』鈴鹿市教育委員会, 1998
- 10) 新田 剛「7. 須賀遺跡発掘調査報告」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』鈴鹿市教育委員会, 1997
- 11) 仲見秀雄『鈴鹿市史』第1巻, 鈴鹿市, 1980
- 12) 中森成行『鈴鹿市国分町富士山10号墳調査概要』鈴鹿市教育委員会, 1978
- 13) 伊藤裕偉・豊田祥三『河曲の遺跡 河田宮ノ北遺跡・宮ノ前遺跡・八重垣神社遺跡(第1~3次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター, 2004
- 14) 浅尾 悟「伊勢国分寺跡(5次)長者屋敷遺跡(1次)」鈴鹿市教育委員会, 1993  
藤原秀樹ほか『伊勢国分寺・国分跡2~4』鈴鹿市教育委員会, 1995~1997
- 15) 小倉 整『国分北遺跡(第3次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター, 2005
- 16) 服部芳人・萩原義彦・松見直茂『国分東遺跡(第1・3次)・沖ノ坂遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター, 2005



- 1 境谷遺跡 2 西ノ岡A遺跡 3 寺山遺跡 4 木田坂上遺跡 5 上箕田遺跡 6 中尾山遺跡 7 沖ノ坂遺跡  
 8 扇広遺跡 9 一反通遺跡 10 磐城山遺跡 11 須賀遺跡 12 神戸中学校遺跡 13 寺田山1号墳  
 14 富士山1号墳 15 富士山10号墳 16 宮ノ前遺跡 17 八重垣神社遺跡 18 伊勢国分寺跡 19 国分遺跡  
 20 南浦遺跡 21 狐塚遺跡 22 国分北遺跡 23 国分東遺跡 24 高岡城跡 25 木田城跡 26 高岡山中世墓

第1図 境谷遺跡位置図(1:50,000) 国土地理院「鈴鹿」1:25,000を使用



第 2 図 境谷遺跡第 2 次発掘調査区位置図 (1:4,000)

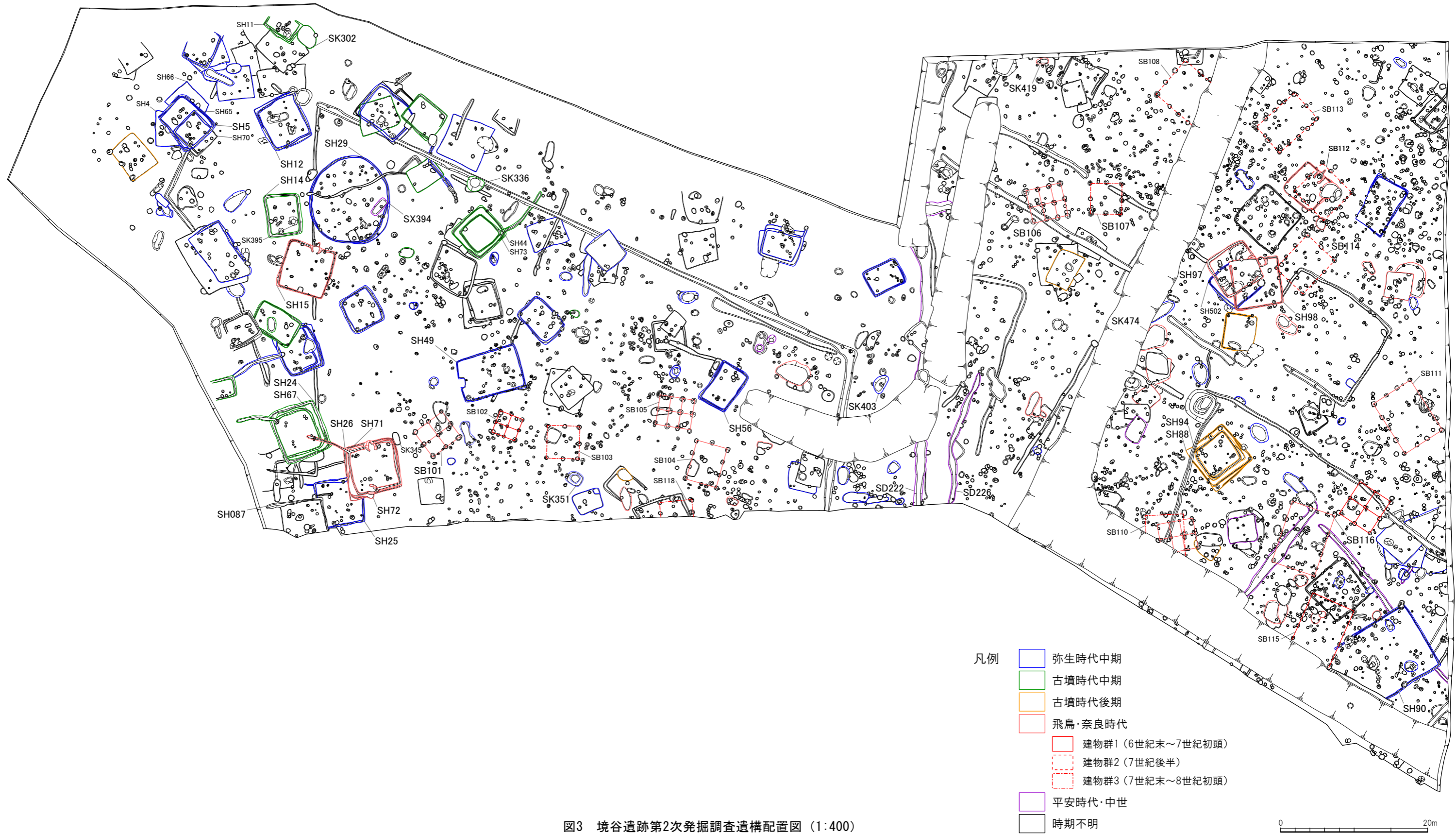


図3 境谷遺跡第2次発掘調査遺構配置図 (1:400)

### Ⅲ 遺構と層位

境谷遺跡の基本層序は、第1層が盛土・造成土、第2層が黄褐色シルト層（地山）となっている。谷側では層厚10cm程度の遺物包含層が一部認められたが、これらは基本的に谷への傾斜に沿って流れ込んできたものと考えられる。遺構検出は第1層をバックホウによって除去したのち、第2層上面で行った。なお、検出面は緩やかな傾斜を持っており、尾根側と谷側では1mほどの比高差がある。確認した遺構は竪穴住居96棟、掘立柱建物18棟、土壇墓1基のほか、土坑、溝、ピットである。

#### 1 弥生時代中期

竪穴住居31棟、土坑40基、溝1条を検出した。所属時期は中期中葉から後葉を中心とする。竪穴住居は谷側に密集し、東の尾根に向けて疎らになり、重複関係も見られなくなっていく。住居は一棟単独で存在するもの、位置をずらして重なるもの、そして軸を揃えた同一地点での建て替えを行うものが見受けられる。平面形は1棟のみ円形で、そのほかは長方形～正方形である。竪穴住居は炉・壁溝・支柱穴を備えるものが多くみられたが、炉や支柱穴を確認できないものも存在する。

**SH5** 長辺5.2m、短辺4.2mの長方形の竪穴住居である。床面積は22㎡を測る。SH4・SH65・SH66・SH70と重複するが、SH5はこれらの中で最も新しいものである。SH65と東側の壁溝が重複していることから、SH65を建て替えたものがSH5と考えられる。付属する施設としては、中央東西に2か所の焼土面と幅15～20cm、床面からの深さ5cmの壁溝がある。支柱穴は4本で、径30～40cmの円形～楕円形を呈し、床面からの深さ30～50cmである。覆土は25cmほどの深さがあり、甕・壺・高杯といった土器のほか、打製石鏃・磨製石鏃・磨製石剣など豊富な石器類が出土した。

**SH12** 長辺5.1m、短辺4.6mを測る方形の竪穴住居。床面積は25㎡である。ほぼ中央に地床炉が位置し、周囲には幅15～35cm、床面からの深さ5cmの壁溝が廻る。支柱穴は4本で、径25～45cmの円形を呈し、深さは不揃いであるものの床面から30～100cm程度を測る。覆土は10～15cm残っており、甕のほか磨製石斧が出土した。また壁溝上では遺構が廃棄されてまもなく流入したとみら

れる凹線文系の壺が出土している。

**SH25** 長辺5.2m、短辺5.0mを測るほぼ正方形の竪穴住居で、床面積は26㎡である。北東にSH26・SH71・SH72、また南西にはSH087が重複する。覆土の深さは10cm以下であり、遺存状況はよくない。中央から北西寄りに焼土面と壁際を全周する溝が認められた。壁溝は幅20～25cm、床面からの深さ3～5cmを測り、北西隅で屋外へ約1m延びる溝に接続する。支柱穴は4本で、径20～30cm、深さ5～60cmである。西側の支柱穴2基の上端周囲は被熱により赤変していたのに加え、そのうち西北側の1基では柱穴から西へ延びる倒木痕が認められた。炭化材や焼土の顕著な集積はみられないが、以上の状況から判断して当住居は焼失したのと考えられる。遺物は甕・壺・鉢・砥石が出土している。

**SH29** 南北で9.6m、東西で8.6mとやや南北に長い円形を呈する竪穴住居で、検出作業中に炭化材と焼土が一面に広がる状況を認めた。床面積は65㎡を測り、今回の調査で確認された弥生時代の竪穴住居の中で第2位の規模を持つ。他の住居との重複関係はなく、東側で平安時代の土壇墓SX394が重なるのみである。付属施設としては、中央土坑・壁溝・支柱穴が挙げられる。中央土坑は長軸0.7m×短軸0.5mの楕円形をなし、深さは17cmである。壁溝は幅20～25cm、床面からの深さ5cmである。支柱穴は7本確認され、1本は未検出であるが、八角形の求心構造をとるものとみられる。支柱穴は径約20～40cmの円形をなし、床面からの深さ55～60cmのものと、15～40cmのものが交互に配される。検出時に認められた炭化材は住居の中心に向かって放射状に広がるものと、それに直行するものがみられた。前者は垂木、後者は横木または小舞と推定される。また、焼土塊も一定量出土しており、一部では炭化材を被覆する状況を確認した。これらから、茅葺きの屋根の上をさらに土で覆った住居が、何らかの要因により焼失した状況が考えられる。なお、覆土は10～15cm遺存しており甕や壺が出土したが、いずれも破片であり完形のもののみはみられなかった。

**SH49** 長辺6.9m、短辺4.8mの規模を有する長方形の竪穴住居である。床面積は33㎡を測る。中央東西に炉が2基配され、壁際には幅15～20cm、深さ5cmの溝が廻る。



主柱穴は4本で、やや台形状に配される。径25～35cmの円形を呈し、床面からの深さ15～25cmを測る。SH49の特徴をなすものは西辺中央に位置する方形の階段状遺構である。幅1.0m、住居内部への奥行0.6mで、残存高は15～20cmである。住居の構築時にこの部分を意図的に残して掘削していったものとみられ、出入りに用いられた施設と考えられる。遺物は甕・壺・砥石がみられたほか、住居内ピットからは壺が口縁を下にした状態で出土した。なお、覆土下層からは炭化材および焼土塊が出土していることから、当住居も焼失した可能性が推測される。

**SH56** 長辺5.0m、短辺3.4mの長方形を呈する竪穴住居である。床面積は17㎡を測る。重複関係は見られず、単独で存在する。付属施設には壁溝・地床炉があるが、主柱穴と断定できるピットは確認できなかった。壁溝は幅20～30cm、床面からの深さ約3～5cmである。炉は遺構の中央の北側に1基認められた。掘り込みはなく、床面をそのまま炉とするものである。覆土は検出面から15～20cm程度遺存しており、3層に分けられる。各層から遺物が出土しており、器形のわかるものとして甕・壺がみられる。また、線刻によって絵を描いた土器片が出土した。並行するS字状そして円および並行する直線からなる構図が確認できるが、破片のため全体の図案は不明である。

**SH90** 長辺残長8.7m、短辺7.9mのやや南北に長い方形住居である。現存する床面積は70㎡を測り、今回調査された弥生時代の竪穴住居の中で最大かつ突出した規模を持つ。南側は流失していることに加え後世の攪乱を受けているため正確な規模は不明だが、主柱穴の位置関係から復元すると長辺は約13.4m、床面積は106㎡前後の大型竪穴住居になるものと推定される。付属施設としては壁溝・炉・主柱穴がある。壁溝は幅20～25cm、床面からの深さ5cmを測り、コの字状に廻る。炉は中央から北東寄りに1基確認された。主柱穴は4基検出した。径70～80cmの楕円形ないしは隅丸方形を呈し、床面からの深さは70cmと掘方が大きく、深い。住居の覆土は最も深いところで30cm程度遺存し、3層に分かれる。上層～中層で6～7世紀代までの須恵器が出土しており、住居の廃絶後、窪地になっていた当遺構に廃棄されたものとみられる。下層からは、弥生土器の甕・壺が出土している。

**SK351** 長軸1.7m、短軸1.5mの不整楕円形をなす土坑である。重機による転圧を受けているため平面形はは

つきりしない。底部は検出面から20cmほどの深さがあり、東側は重機による転圧を受けているためテラス状をなしているが、本来は椀状に掘りこまれた遺構であると考えられる。覆土は3層に分かれ、焼土ブロック・炭化物を含む上・中層から遺物が出土している。やはり破片資料が多いが、器形のわかるものとしては壺がある。

**SK403** 鳥足状の記号が線刻された土器片が出土した土坑である。長軸2.1m、短軸1.3mの楕円形を呈する。覆土は2層に分けられ、最も深いところで約25cmを測り、炭化物が混じる上層から土器片が大量に出土した。記号土器は上層から出土し、壺の胴部に施された2条の櫛描文の上にそれぞれ鳥足文が刻まれる。そのほか器形の判るものとして甕・壺などが出土しているが、完全に復元できる土器が見られないことから廃棄土坑として機能していたものと考えられる。

## 2 古墳時代中期

竪穴住居11棟、土坑5基を検出した。第1次調査では確認されていない時期の遺構である。この時期の住居は谷側に限定され、同一地点での軸を一にした建て替えが2ヶ所で確認されたほかは一時期に単独で存在している。平面形はほぼ正方形を呈し、壁溝・炉・主柱穴が付帯するが、すべてに備わるわけではない。

**SH14** 長辺4.7m、短辺3.9mの長方形をなす竪穴住居である。床面積は18㎡を測る。付属する施設としては炉・壁溝・主柱穴がある。炉は中央やや北寄りに存在し、床をそのまま炉とするものである。壁溝は幅30～40cm、床面からの深さ5cmほどである。主柱穴は4本で、直径35～40cm、深さ20～35cmで住居の平面形と同じ長方形に配される。覆土は3層に分けられ、台付甕・高杯・小型壺といった土器に加え、石斧が3点出土した。なお床面で南東の主柱穴1基と重複するSK398を検出した。被熱痕のある礫と炭化物の集積が見られ、壁面は被熱により赤変、硬化していた。所属時期や用途については不明であるが、重複関係からはSH14より新しい時期に属する遺構と考えられる。

**SH24・SH67** 2棟が重複する方形の竪穴住居である。主軸を揃えた同一地点での建て替え、拡張が行われており、古いものからSH67→SH24へと時期的変遷をたどると考えられる。また、同様の建て替えはSH44とSH73においても認めることができる。

**SH67** 長辺4.8m, 短辺4.5m, 床面積22㎡で, 付属する施設としてはそれぞれ, 壁溝・地床炉・屋外溝・支柱穴がある。壁溝は幅約20~30cm, 床面からの深さ約5~10cmであり, 南西側の壁溝はSH24と重複する。支柱穴は全部で4本確認された。直径20~30cm, 床面からの深さ約40cmを測る。覆土は一括埋め戻しによる単層からなり包含する遺物は極めて少ないが, 北西の壁溝内からまともな遺物が出土している。台付甕・高杯・小型丸底壺などがあり, 埋没状況からみて一括性が高いものと考えられる。

**SH24** 長辺6.0m, 短辺5.4mで, 床面積は32㎡を測る。付属する施設としては壁溝・地床炉・屋外溝がある。地床炉は中央やや北西よりに位置する。壁溝は幅約30~50cm, 床面からの深さ5~10cmであり, 南西の壁溝は2棟で重複していることから, 建て替えの際そのまま利用し, 3方向に住居を拡張したものと考えられる。また住居の北西隅から西の谷部に向かって延びる屋外溝は幅40~50cm, 検出面からの深さ30~50cm, 残存長3.5mを測る。底面の高さは谷部に向かって徐々に下がっていく。また壁溝も谷部に向かってその深さを増していくことから, 壁溝と屋外溝は一連の遺構であり, 地表面からの浸透水を谷部へと逃がす機能をもっていたものと考えられる。支柱穴は全部で4基確認された。直径20~30cm, 床面からの深さ40~60cmを測る。覆土は上・下層に分かれ, 上層に飛鳥時代の土師器・須恵器が含まれる。また, 北西の壁溝からまともな土師器台付甕・高杯・小型丸底壺などの遺物が出土している。

**SK302** 長軸2.6m, 短軸2.0mのやや楕円形をなす土坑である。重複する古墳時代中期の竪穴住居SH11よりも新しいものである。検出面からの深さは中央で20cmほどやや深く, それから緩やかに立ちあがる。覆土のうち上層から遺物が出土しており, 器形が判るものとしては台付甕・高杯がある。

**SK336** 長軸2.3m, 短軸1.5mのほぼ円形を呈する土坑である。時期不明の溝SD212によって切られる土坑である。最も深いところで検出面から約35cmを測り, 底部は丸みをおび, そこから湾曲して立ち上がる。覆土は2層に分かれ, とともに炭化物を含む堆積であるが, 上層のみに土器が含まれ, 土師器台付甕, 須恵器甕が出土している。

### 3 古墳時代後期

竪穴住居5棟, 土坑2基を検出した。竪穴住居はほぼ方形を呈し, カマド・壁溝・支柱穴を備える。古墳時代後期に帰属する住居は少なく, 散在する傾向にある。しかし, カマドの痕跡が認められる時期不詳の竪穴住居若干存在するため, 古墳時代後期から奈良時代の住居は実際にはさらに多くなるものと考えられる。

**SH88・SH94** 主軸をほぼ同じくして2棟が重複する竪穴住居である。時期的には古いものからSH88→SH94へと変遷をたどるものとみられる。同一地点での建て替え, 縮小が認められる。

**SH88** 長辺5.3m, 短辺5.1mのほぼ正方形をなす竪穴住居である。床面積は27㎡を測る。覆土はほとんど遺存しておらず, 壁溝・支柱穴を検出するにとどまった。カマドは存在しないか, 床面とともにすでに削平されているものと考えられる。壁溝は幅約15~20cm, 深さ5~10cm程度である。支柱穴は3本あり, 径約25~30cmの円形~楕円形で, 検出面からの深さ25~35cmを測る。また, 北側と東側の壁溝とほぼ並行する溝を一部確認しており, 土層の断面観察からは, SH88の構築以前にはほぼ同軸の住居が存在した可能性があるものと推察される。SH88からの遺物の出土は皆無であったが, SH94との重複状況から6世紀後半に位置づけられるものと考えておく。

**SH94** 長辺4.3m, 短辺3.9mを測るやや南北に長い方形住居である。床面積は17㎡である。覆土は検出面から約15cmの深さがあり, 地山ブロック, 炭化物が混じる単層である。付属施設には壁溝・支柱穴・カマドがある。壁溝は幅25~30cm, 床面から10cm程度の深さがある。支柱穴は4本柱構造をとり, 径35~50cmの円形で, 床面からの深さ25~45cmである。カマドは西壁に造り付けられており, 煙道を認めたものの, 袖および燃焼部はその痕跡を検出したにとどまった。SH94からは土師器甕, 須恵器甕・高杯・杯身・杯蓋が出土しており, それらの年代からSH94は6世紀後半に属するものと考えられる。

### 4 飛鳥・奈良時代

竪穴住居7棟, 掘立柱建物18棟, 土坑22基を検出した。当該期の建物は竪穴式と掘立柱式の建物によって構成されるのが特徴である。竪穴住居は谷側から尾根まで見られるものの, 分布は疎らである。平面形は正方形をな

し、壁溝・カマド・主柱穴を備える。

掘立柱建物は側柱建物12棟、総柱建物6棟を確認した。尾根側にややまとまって分布する傾向にある。側柱建物は桁行最大4間から最小2間のものが見られ、総柱建物は桁行2間または3間のものに分かれる。第1次調査の成果をふまえると<sup>17)</sup>、建物の方位は大きく三つのまとまりに分かれることから、建物群の時期的な変遷が予測できる。なお、これらのまとまりにも属さない建物があることから時期的にはさらに細かく分けられると考えられる。

① 建物群1：SB102、SB115、SB116

棟方位がN1° W～N5° Wでほぼ正方位を向くもの。6世紀末～7世紀初頭に相当する。

② 建物群2：SB108・SB112・SB113・SB114

棟方位がN16° E～N23° Eと正方位からやや東に振れるもの。近接して分布するグループである。7世紀後半に位置づけられる。

③ 建物群3：SB103・SB107・SB110・SB118

棟方位がN24° W～N27° Wと正方位から西に傾くもの。7世紀末～8世紀初頭に比定できる。

**SH15** 長辺、短辺ともに5.4mのほぼ正方形をなす掘立柱住居である。床面積は約29㎡である。覆土は検出面から20cm程度の深さで残る。付属する施設は壁溝・カマド・主柱穴がある。壁溝は幅15～20cm、深さ5cmである。また、壁溝底部では径約10cm、深さ約10cmの壁支柱が一定の間隔を持って並んでいる様子が確認できた。間隔は40～60cmに収まるものが多い。壁支柱は掘方が見られないことから、直接撃ち込まれた杭の痕跡と考えられる。草壁か板壁を固定するためのものであろう。カマドは北壁中央に造り付けられており、焚口・袖・煙道が残存する。燃焼部には被熱し赤変した硬化面が認められるとともに、下半分を打ち欠き支脚へと転用された甕が据え置かれていた。この甕の上に重なるように長胴甕が出土し、もともとは支脚とした甕の口縁上に置かれていたものと考えられる。また、カマドの両脇には径35cm、深さ20～25cmの円形ピットが掘りこまれている。主柱穴は4本確認され、径40cm、床面からの深さ40cmを測る。さらには、南壁中央には深さ5cm程度と浅く掘りこまれた長軸60cm、短軸50cmの楕円形の遺構があり、カマドと同じ住居の主軸上にあることから、出入り口に関連する遺構と考えられるものの詳細は不明である。遺物は土師器甕のほか、須恵器甕・壺・杯身がみられ、これらの遺物から

当遺構の時期は飛鳥時代前半に比定できる。

**SH97・SH98・(SH502)** 3棟重複する掘立柱住居である。SH97とSH502は軸が東に触れるが、SH98は西へ傾く。また、切りあい関係からSH502→SH98→SH97へと変遷していくものと考えられる。これらから、3棟に重複関係はみられるものの時期差の存在することが想定される。なおSH502からは弥生土器甕が出土しており、弥生時代中期の遺構と考えられる。

**SH98** 5.4m×5.4mの正方形を呈する掘立柱住居である。床面積は29㎡を測る。覆土は地山ブロック、炭化物が混じる単層で、10cm程度残っていた。覆土の下には厚さ3～5cmの貼床が認められた。付属施設には壁溝・主柱穴・カマドがある。壁溝は幅約20cm、床面からの深さ約10cmである。主柱穴は4本あり、径50～80cmの円形～楕円形をなし、床面からの深さ20～50cmを測る。カマドは北壁中央やや東よりに造られており、袖、燃焼部が認められた。燃焼部ではカーボンベッド、硬化面を認めたものの、支脚穴は確認できなかった。遺構の覆土中からは土師器甕、須恵器高杯・杯身・杯蓋が出土しており、時期は7世紀前半に比定できる。

**SH97** 長辺5.0m、短辺4.9mの正方形をなす掘立柱住居である。床面積は25㎡である。覆土は地山ブロックおよび炭化物混じりの単層で、15cm程度掘削すると底面にいたる。底面には厚さ3cm程度の貼床が認められた。付属施設には壁溝・主柱穴・カマドがある。壁溝は幅30～40cm、床面からの深さ約10cmである。主柱穴は4本あり、径40～50cmの円形をなし、床面からの深さは約50～60cmである。カマドは北壁隅に造りつけられ、保存状態は良くないが、袖と燃焼部を検出した。燃焼部ではカーボンベッド、硬化面を認めたが、支脚穴は確認できなかった。遺構の覆土中からは、土師器甕、須恵器甕・杯身・杯蓋が出土している。6世紀末葉から7世紀初頭の所産と考えられる。

**SH26・SH71・SH72** 3棟が重複する掘立柱住居である。検出の時点では1棟単独の掘立柱住居として把握していたが、掘削を進めるうちに、3基のカマドがみつき、全部で3棟の掘立柱住居が存在することが判明した。SH71はSH26が一回り小さく建て替えられたもので、主軸を同じくし、カマドもほぼ同位置にあることからそれほど時期差はないものと考えられる。SH72はSH26・SH71よりも新しく、主軸も前2棟と異なる。時期的には、古いものか

らSH26→SH71→SH72へと変遷をたどることができる。

**SH26** 長辺5.8m, 短辺5.6mを測るほぼ正方形の竪穴住居である。床面積は32㎡である。時期不明の土坑SK345を切る。覆土はほとんど遺存しておらず、検出面から3cmほど掘削すると床面にいたる。付属施設としては壁溝、支柱穴、カマドがある。壁溝は幅20～30cm, 床面からの深さ約5～10cmである。支柱穴は4本で約15～30cm, 床面からの深さは35～50cmである。カマドは北壁中央に壁溝上に造り付けられている。建て替えのさい半分以上破壊されているため、燃焼部、袖の痕跡を確認するとどまった。遺物はほとんど出土していないものの、SH71との関連からみて、飛鳥時代に位置づけられるものと考えられる。

**SH71** 長辺5.2m, 短辺5.1mのほぼ正方形を呈する竪穴住居である。床面積は26㎡を測る。覆土は約15～20cm残っていた。付属施設としては、壁溝・支柱穴・カマドが存在する。壁溝は幅約20～35cm, 床面からの深さ約5cmで、北西隅で屋外に延びる溝と接続する。この屋外溝は壁溝上にカマドが造られることからみて排水の機能を持っていたとは考えにくく、実際の用途は不明である。支柱穴は床面における検出状況からすると、SH26のものがそのまま利用されているものとみられ、4本柱構造である。カマドはSH26と同位置、北壁中央に備えつけられている。カマドの残りはそれほど良くないが、袖・燃焼部・煙道が認められた。燃焼部は焚口側に明確な硬化面はみられなかったものの、支脚に転用されたと考えられる小型の土師器甕が口縁側を上にして置かれていた。また、カマドの右袖近くでは長さ約25cm, 幅約20cm, 厚さ約8cmの不整三角形の被熱を受けた石が出土した。カマドの構造材として利用された可能性がある。遺物は土師器甕・甌・杯、須恵器杯蓋が出土しており、飛鳥時代に属する遺構であると考えられる。

**SH72** 長辺復元長2.9m, 短辺2.6mの方形をなす竪穴住居である。床面積は7㎡を測る。覆土は15cmほど残っていたものの、北側と東側の立ち上がりは平面で確認できなかった。付属施設はカマドのみで、壁溝・支柱穴はみつかっていない。カマドは燃焼部・袖・煙道が遺存していた。燃焼部には顕著な硬化面は認められなかったが、支脚石が原位置を保ってみつかった。また、カマドの天井の崩落土と考えられる堆積層中からは、平瓦が出土しており、天井の構造材として用いられていたと考えられ

る。おそらく、国分町の寺院群内から持ち込まれたものと推察される。当遺構からは土師器甕・高杯が出土している。奈良時代の遺構と考えられる。

**SB116** 建物群1に属する3間×2間(7.0m×5.0m)の側柱建物である。床面積は35㎡で、棟方位はN5°Wである。柱の掘方は径約40～50cmの円形～隅丸方形を呈し、検出面からの深さは30～40cmを測る。掘方の覆土からは6世紀末～7世紀初頭の須恵器杯蓋が出土している。

**SB114** 建物群2に属する3間×2間(5.0m×4.2m)の側柱建物である。床面積は21㎡で、棟方位はN16°Eである。柱穴の掘方は径40～60cmの円形を呈し、検出面からの深さ30～50cmを測る。柱穴からは7世紀後半の須恵器杯が出土している。SB114は重複するSH98(7世紀前半)よりも新しいことから年代的な齟齬はない。

**SB107** 建物群3に属する2間×2間(3.4m×3.4m)の側柱建物である。床面積は12㎡で、棟方位はN24°Wである。柱穴の掘方は径50～55cmの円形を呈し、検出面からの深さは20～45cmを測り、隅柱でやや深くなる傾向がある。柱穴からは7世紀末～8世紀初頭の須恵器杯が出土しており、当遺構の年代もそのころに相当するものと考えられる。なお、同群のSB118からも同時期の須恵器杯蓋が出土している。

**SB101** 2間×2間(3.4m×3.4m)の総柱建物である。床面積は12㎡を測る。棟方位はN29°Eである。側柱の掘方は円形から楕円形を呈し、直径45～60cm, 検出面からの深さ25～45cmである。束柱の掘方は円形をなし、径約40cm, 深さ約45cmである。側柱掘方の覆土中からは、土師器甕・壺・高杯のほか、須恵器杯蓋が出土している。この須恵器の年代はTK209併行であることから、当遺構の時期は6世紀末～7世紀初頭を下らないものと考えられる。

**SB106** 3間×2間(3.8m×3.6m)の総柱建物である。床面積は14㎡, 棟方位はN38°Wである。側柱の掘方は径55～80cmの円形～楕円形を呈し、検出面からの深さ30～55cmを測り、隅柱でやや深くなる傾向がある。2基の束柱の掘方は径55～60cmの円形～隅丸方形を呈し、検出面からの深さは約30cmである。南辺の中柱の一つには、径10cm程度の礫を円形に配した根石が認められた。柱穴の掘方からは土師器甕、須恵器杯が出土している。ともに破片であり、直接の時期決定は困難であるが、棟方位から推定するに飛鳥時代に属する建物と考えられる。

**SK419** 長さ1.3m, 幅0.6mを測る隅丸二等辺三角形を呈する土坑である。その頂点は等高線と直交し、谷部を向く。底部のみが残り、立ち上がりがわずかに認められるものの、側壁は後世の削平を受けなくなっていた。覆土は、焼土と炭化物を含む暗褐色シルトの単層で軟らかい。底部は火熱を受け中央部分で明褐色、その周辺で赤褐色を呈するとともに、中央部分が極めて堅緻に焼け締まっていた。覆土中からは、土師器数点が確認されたものの、器形のわかるものはない。以上の特徴を、県下における同様の遺構の調査事例と比較すると<sup>18)</sup>、当遺構は広義の土師器焼成土坑である可能性が高いものと考えられる。時期を特定できる遺物は見つかっていないが、飛鳥～奈良時代頃に相当しよう。

**SK474** 東半を攪乱によって欠くため規模は不明であるが、長辺残存長2.8m, 短辺2.5mの隅丸方形をなすとみられる土坑である。時期不明の土坑SK471と重複する。覆土は2層に分かれ、下層から須恵器が出土した。高杯・杯身・杯蓋・こね鉢が見られ、6世紀末～7世紀初頭に位置づけられるままとりのよいものである。このほか土師器の半環把手付浅鉢が出土している。

## 5 平安時代～中世

土壇墓1基, 土坑5基, 溝5条を確認した。

**SX394** 長辺約2.0m, 短辺約0.85mを測り、南側でやや窄まる隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは約30cmで底面は平坦になっている。覆土は3層に分けられるが、地山ブロックを含む人為的なものである。北側でロクロ製土師器皿・小皿が重なって出土している。この2点を除き遺物は出土していない。

**SD222** 調査区中央北側の谷へと延びる溝である。幅1.1m, 深さ20cmを測る。覆土は単層であるが、底部から山茶椀が出土している。鎌倉時代の遺構であると考えられる。ほぼ並走する溝SD226からも同時期の遺物が見つかっている。溝の性格については不明である。

註

17) 同註1) 文献

18) 上村安生「土師器焼成坑について」『Mie history』vol. 6, 1993

## IV まとめ

今回の調査では、弥生時代中期から奈良時代にわたる数多くの建物跡が検出されたことが最大の成果である。弥生時代には大型の円形および方形住居が確認されたことに加え、焼失住居が3棟存在することが明らかとなった。また、新たに古墳時代中期の遺構が発見されたことも特筆すべき点といえる。さらには線刻土器を含む弥生時代から中世にわたる豊富な土器、ナイフ形石器をはじめとする多様な石器類が出土した。これらによって鈴鹿川下流域の集落の動態を一層鮮明にしていくうえで新たな資料を提供することになった。

### 1 弥生時代中期

弥生時代の集落の開始は受口状口縁壺が出土する中期中葉に求めることができる。下限は凹線文系土器の存在から、中期中葉に相当する<sup>19)</sup>。後期の遺物もみられるが、極めて少ない。

弥生時代の遺構は調査区全域で確認できる。今回の調

査で見つかったSH29は第1次調査で確認された5棟の円形住居と比べても長軸が10m近い大型で、その規模は鈴鹿川下流域で突出している。さらにSH90は復元床面積が約106㎡になる超大型の竪穴住居で、三重県下で最大の四日市菟上遺跡SH71(約134㎡)<sup>20)</sup>に次ぎ、津市長遺跡SH11(約101㎡)<sup>21)</sup>に匹敵する。安濃川流域や朝明川流域の調査成果からは、弥生時代の竪穴住居の平面形態は、円形から長方形を経て方形へと変化していくことがわかっている。鈴鹿川下流域も沖ノ坂遺跡に代表されるように同様の流れにあると考えられる<sup>22)</sup>。この傾向を鑑みれば、SH29とSH90の時期差や系譜関係について詳細な検討が待たれるが、この点は第1次・第2次調査を通して明らかになった円形・方形の焼失住居の存在、中期中葉に始まる中尾山遺跡における墳墓の造営、扇広遺跡、一反通遺跡における環濠の出現といった様々な調査成果とともに、鈴鹿川流域の伊勢湾西岸地域における相対的な位置づけとも深く関わってくるものであるといえる。

## 2 古墳時代中期

弥生時代後期から古墳時代前期には境谷遺跡は集落としての機能を停止するが、古墳時代中期になって再び集落が営まれるようになる。遺構としてはSH24・SH67といった地床炉を有し、須恵器を伴わず、土師器のみが出土する竪穴住居を代表とする。土師器は台付甕を特徴とし、それに高杯、小型丸底壺が組み合わさった組成である。おおよそ5世紀に相当する時期であると推定される<sup>23)</sup>。しかしながら、遺構の分布が谷側に限定され、重複関係に乏しいことから推察されるように、短期間に小規模な集落として機能していたと考えられる。

鈴鹿川下流左岸の段丘上では、古墳時代中期の集落遺跡は知られていない。寺田山1号墳や富士山1号墳をはじめとする古墳が密集することから、当該期の段丘上は墳墓域としての性格が強いものと考えられる。一方で南面する低地部には河田宮ノ北遺跡といった集落域と推定される遺跡が分布している。この鈴鹿川下流域の集落一墳墓という2極化はすでに指摘されており<sup>24)</sup>、ごく短期間で終焉に向かう古墳時代中期の境谷集落の位置づけもこうした脈絡のなかで行っていく必要がある。

## 3 古墳時代後期～奈良時代

奈良時代にいたるまで安定的に集落が継続し、6世紀前半を除き、目立った断続はみられない。今回検出した掘立柱建物の棟方位からは、飛鳥から奈良時代にかけていくつかの小期にわけられることが示唆される。その下限は伊勢国分寺といった周辺寺院の瓦が出土したSH72などの年代から、少なくとも8世紀後半まで下るものと推測される。

飛鳥時代になると、竪穴住居と掘立柱建物が並存するようになる。境谷遺跡の位置する国分町周辺は、伊勢国分寺、河曲郡衙といった律令期の重要な遺跡がまとまって分布する地域であり、周辺に営まれた集落もこうした遺跡の影響を強く受けていたことが知られている。しかしながら、今回の調査では特殊な遺構や遺物は見つかっておらず、建物の配置や方位に着目しても顕著な企画性は認められない。有力者の居住地というよりはむしろ、一般的な集落遺跡としての性格を帯びていたものと考えられる。

## 4 平安時代・中世

遺構・遺物ともに散見されるものの、具体的な様相は不鮮明である。ただし、国分北遺跡や国分東遺跡のような計画的な建物群が並ぶ集落としてよりはむしろSX394の存在から示唆されるように墳墓域あるいは耕作地としての利用状況を想定したほうが適当であると考えられる。

現在、第1次および第2次調査で検出された遺構・遺物について整理中の段階である。今後は2カ年におよぶ調査成果に基づき総合的な分析と検討を詳細に行う予定である。それによって境谷遺跡の具体的様相および鈴鹿川流域における弥生時代から古代にわたる集落の変遷・動態を明らかにしていきたい。

### 註

- 19) 上村安生「1 伊勢・伊賀地域 (1) 伊勢地域」『弥生土器の様式と編年—東海編—』(加納俊介・石黒立人編) 木耳社, 1992
- 20) 穂積裕昌ほか『菟上遺跡発掘調査報告—本文編—』三重県埋蔵文化財センター, 2005
- 21) 池端清行『長遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター, 2000
- 22) 註6) 文献参照。
- 23) 山田 猛『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター, 2005
- 24) 伊藤裕偉「XIV 調査のまとめと検討」註13) 文献



調査区周辺地形（南から）



調査区全景



調査区西半全景（東から）



SH25 完掘（東から）



SH29 遺物出土状況（南から）

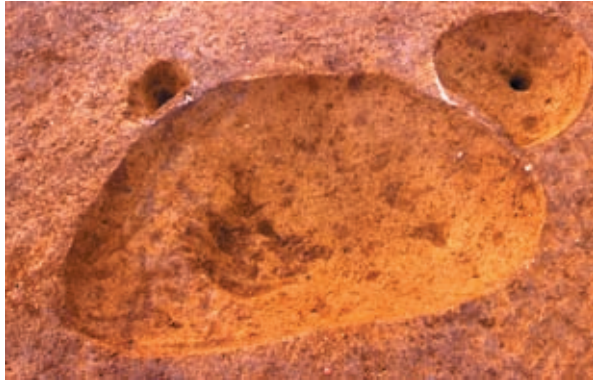


SH49 完掘（東から）

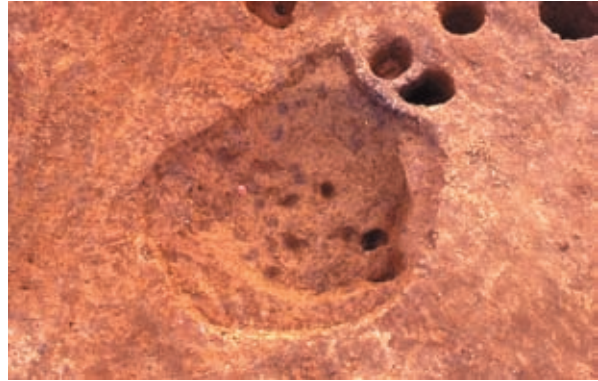


SH90 完掘（北から）





SK403 完掘 (東から)



SK351 (北から)



SH14 完掘 (西から)



SH24・SH67 完掘 (東から)



SH24・SH67 遺物出土状況 (南から)



SK302 完掘 (南から)



SH15 完掘 (南から)



SH15 カマド遺物出土状況 (北から)



SH97・SH98・SH502 完掘（西から）



SB116 完掘（北から）



SB107 完掘（東から）



SB106 完掘（東から）



SK419 完掘（北から）



SX394 遺物出土状況（北から）



SK474 遺物出土状況（北から）

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	さかいだにいせき だいにじはつくつちようさ がいようほうこく							
書名	境谷遺跡 第2次発掘調査 概要報告							
編著者名	浅野隆司 下津菜な子 業天唯正							
編集機関	鈴鹿市 文化振興部 考古博物館							
所在地	〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町 224 番地 TEL059 (374) 1994							
発行年月日	2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さかいだにいせき 境谷 遺跡	すずかしこくぶちよう 鈴鹿市国分町 あざさかいだに 字 境 谷	24207	542	34° 54' 15"	136° 34' 40"	20070523 ～ 20071130	7,681 m <sup>2</sup>	リサイクル センター 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
境谷遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 飛鳥時代 奈良時代	竪穴住居 掘立柱建物 土坑 溝	弥生土器 線刻土器 土師器 須恵器 石斧 石鏃 石庖丁 鉄製品		弥生時代中期の竪穴住居 31 棟、古墳時代中期の竪穴住居 11 棟が検出された集落跡		

---

## 境谷遺跡 第2次発掘調査 概要報告

—三重県鈴鹿市国分町字境谷 所在—

2008 (平成 20 年) 年 3 月

編集・発行 鈴鹿市考古博物館

〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町 224 番地

TEL : 059-374-1994 FAX : 059-374-0986

E-mail : kokohakubutsukan@city.suzuka.lg.jp

URL : <http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/>

印 刷 有限会社 三鈴印刷

---

S a k a i d a n i   S i t e   2 n d   E x c a v a t i o n  
P r e l i m i n a r y   R e p o r t

March, 2008  
S u z u k a   M u n i c i p a l   M u s e u m   o f   A r c h a e o l o g y